



『歴世真仙体道通鑑後集』 卷一：「金母元君」
(中江彬教授退職記念号)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-06-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 平木, 康平, 重信, あゆみ メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00004480

『歴世真仙体道通鑑後集』 卷一

— 「金母元君」 —

平木康平
重信あゆみ

本稿は、元代の道士である趙道一によって編纂された『歴世真仙体道通鑑後集』巻一のうち、「金母元君」の部分の訳注である。「金母元君」とは「西王母」のことである。「西王母」は現在においては女性の仙人を統括する道教の神として知られているが、『山海経』西山経では豹尾虎齒の姿をし、疫病や刑罰を掌る神とされ、また、『淮南子』覽冥訓では不死の薬を持つ神話伝説上の神とされている。「金母」という言葉は『拾遺記』に初めてみえる。『歴世真仙体道通鑑後集』では「無上元君」「太一元君」の次に記載され、元代において西王母が仙人の中でも高い位置についていたことが知られる。

凡例

- 一 原文は道蔵本（『道蔵』文物出版社 一九八八年）を底本とした。
- 一 『歴世真仙体道通鑑後集』本文の字体は原則として底本の通りとした。

- 一 訳文、註では常用漢字を使用した。
- 一 主として張君房纂輯、蔣力生等校注『雲笈七籤』（華夏出版社 一九九六年）と対照した。
- 一 註は原文中に算用数字により付し、最後に記した。

(原文)

金母元君者¹、九靈太妙龜山²金母也。一號太靈九光龜臺金母³、一號曰西王母⁴、乃西華之至妙、洞陰之極尊。在昔道氣凝寂⁵、湛體無爲、將欲啓迪玄功、生化萬物。先以東華至眞之氣、化而生木公⁶焉。木公生於碧海⁷之上、蒼靈之墟、以生陽和之氣、理於東方。亦號曰王公焉。又以西華至妙之氣、化而生金母焉。金母生於神洲⁸伊川⁹、厥姓緜氏¹⁰。生而飛翔、以主陰靈之氣、理於西方。亦號王母。皆挺質大无¹¹、毓神玄奧、於西方渺莽之中、分大道醇精之氣、結氣成形。與東王木公共理二氣、而育養天地、陶鈞萬物矣。體柔順之本、爲極陰之元、位配西方、母養群品。天上天下、三界十方¹²、女子之登仙

得道者、咸所隸焉。

(書き下し)

金母元君なる者は、九靈太妙龜山の金母なり。一に太靈九光龜臺金母と號し、一に號して西王母と曰ふ。乃ち西華の至妙、洞陰の極尊なり。在昔道氣凝寂して、體を無爲に湛し、將に玄功を啓迪し、萬物を生化せんと欲す。先づ東華至眞の氣を以て、化して木公を生む。木公は碧海の上、蒼靈の墟に生まれ、以て陽和の氣を生じて、東方を理む。亦號して王公と曰ふ。又西華至妙の氣を以て、化して金母を生む。金母は神洲伊川に生まれ、厥の姓は緜氏なり。生まれながらにして飛翔し、以て陰靈の氣を主り、西方を理む。亦王母と號す。皆質を大无に挺し、神を玄奥に毓くみ、西方の渺莽の中に於て、大道の醇精の氣を分かち、氣を結びて形を成す。東王木公と共に二氣を理めて、天地を育養し、萬物を陶鈞す。柔順の本を體して、極陰の元と爲り、位は西方に配され、群品を母養す。天上天下、三界十方の女子の登仙して道を得る者は咸隸う所なり。

(訳)

金母元君は、九靈太妙龜山の金母である。一に太靈九光龜台金母元君と言ひ、一に西王母と言う。これこそ西華の至妙であり、洞陰の

極尊である。むかし、道氣は凝縮して、體を無爲に浸し、奥深い働きをうち広げて、万物を生成しようとした。まず東華至眞の氣を以て、化成し木公を生んだ。木公は碧海のほとり、蒼靈の丘に生まれ、陽和の氣を生じて、東方を治めた。また王公とも呼ばれた。また西華至妙の氣を以て、化成して金母を生んだ。金母は中国の伊川に生まれ、その姓は緜氏という。生まれながらに飛翔し、陰靈の氣を主り、西方を治めた。また王母とも称した。ともに體を大无に養ひ、神を玄奥に育み、西方の果てしなくひろい中において、大道の混じりけの無い氣を分け、氣を結合させて形を作り上げた。東王木公と共に陰陽の二氣を治め、天地を育て、万物を生成した。柔順の本質を體し、極陰の根元となり、西方に配置され、万物を生み育てた。天上天下、三界十方の女子の登仙して、道を得た者は皆西王母に隸属した。

(原文)

所居宮闕、在龜山¹³之春山¹⁴、崑崙¹⁵玄圃、閩風¹⁶之苑。有金城千重、玉樓十二、瓊華之闕、光碧之堂、九層玄臺¹⁷、紫翠丹房。左帶瑤池¹⁸、右環翠水。其山之下、弱水¹⁹九重、洪濤萬丈。非鸞車羽輪不可到也。

尚書帝驗期曰王母之國在西荒之野所謂玉闕墜天、綠臺承霄、青琳之字²⁰、朱紫之

房、連琳綵帳。明月四朗。戴華勝²¹、佩靈章²²。左侍仙女、右侍羽童。

寶蓋沓映、羽旆²³蔭庭。軒砌之下、殖²⁴以白環之樹、丹剛之林。空青萬條。瑤幹千尋。無風而神籟²⁵自韻²⁶、琅然皆奏八會²⁷音也²⁸。神洲²⁹在崑崙之東南。故爾雅云西王母日下³⁰是矣。又云、王母鬢³¹髮戴勝、虎齒善嘯者、³²此乃王母之使、金方白虎之神、非王母之眞形也。元始天王³³授以萬³⁴天之統³⁵、龜山九光之籙³⁶、使制召萬靈、統括眞聖、監盟證信、總諸天之羽儀。天尊上聖朝宴之會、考校之所、王母皆臨映³⁷焉。上清寶經、三洞玉書、凡所授度、咸所關與也³⁸。

(書き下し)

居する所の宮闕は、龜山の春山、崑崙の玄圃、閩風の苑に在り。金城千重、玉樓十二、瓊華の闕、光碧の堂、九層の玄臺、紫翠の丹房有り。左に瑤池を帯び、右に翠水を環らす。其の山の下、弱水九重し、洪濤萬丈たり。颺車羽輪に非ざれば到るべからざるなり。尚書帝驗期に曰く「王母の國は西荒の野に在り」と。所謂玉闕は天を墜り、緑臺は霄を承け、青琳の字(宇)、朱紫の房、連琳の綵帳あり。明月四朗す。華勝を戴き、靈章を佩ぶ。左に仙女を侍らせ、右に羽童を侍らす。寶蓋は沓映し、羽旆は庭を蔭ふ。軒砌の下、殖うるに白環の樹、丹剛の林を以てす。空は青く萬條たり。瑤幹は千尋たり。無風にして神籟自ずから韻べ、琅然として皆八會の音を奏づるなり。神洲は崑崙の東南に在り。故に『爾雅』に云ふ「西王母の日下」と。是れなり。

又云ふ「王母鬢髮にして勝を戴き、虎齒にして善く嘯く者なり」と。此れ乃ち王母の使ひ、金方の白虎の神にして、王母の眞形に非ざるなり。元始天王授くるに萬天之統、龜山九光の籙を以てし、萬靈を制召し、眞聖を統括し、證信を監盟し、諸天の羽儀を總べしむ。天尊上聖の朝宴の會、考校の所は、王母は皆臨映す。『上清寶經』『三洞玉書』、凡そ授度する所は、咸關與する所なり。

(訳)

居住している宮殿は、龜山の春山、崑崙の玄圃、閩風の苑に在る。金城が幾千も重なり、玉樓は十二棟あり、瓊華の門、光碧の堂、九層の玄台、紫翠の丹房がある。左には瑤池をめぐらし、右は翠水を環らしている。その山の下には、弱水が九重に取り巻き、大きな波が一万丈の高さに波立っている。颺車や羽輪でなければ到ることができない。尚書帝驗期には「王母の國は西荒の野に在り」とある。いわゆる玉闕は天をかざり、緑台は高空に達するほどの高さであり、青琳の屋根、朱紫の部屋、連琳の帳がある。明月が四方を照らしている。華勝を戴き、靈験あらたかな章を腰にさげている。左に仙女を侍らせ、右に羽童を侍らせている。宝蓋は照り映えて、羽のついた旗は庭を覆っている。軒の下には、白環の樹、丹剛の林を植えている。青空に何万本もの木々が伸びている。瑤幹の高さは千尋もある。風が吹か

なくとも神籙は自然と響き、琅琅として皆八会の音を奏でている。

神洲は崑崙の東南にある。故に『爾雅』に「西王母の日下」とあるのが是である。また「王母は蓬髮にして、勝を戴き、虎齒にして、善く嘯く者である」という。これは王母の使いの西方の白虎の神のことであり、王母の眞の形ではない。元始天王は、(王母に) 萬天を統括する龜山九光の籙授け、万靈を治め、眞聖を統括し、証信を監視し、諸天の儀式を統括させた。天尊上聖の朝廷の宴や諸経の編纂の場には、王母は皆臨席し照覧した。『上清宝経』や『三洞玉書』など、およそ授与した経典は、王母がすべてその編纂に関与したものである。

(原文)

昔³⁹黄帝討蚩尤之暴威、所未禁。而蚩尤幻化多方⁴⁰、微風召雨、吹煙噴霧。師衆大迷、帝歸息太山之阿。昏然憂寐⁴¹。王母遣使、披玄狐之裘⁴²、以符授帝。曰太一⁴³在前⁴⁴。得之者勝、戰則克矣。符廣三寸、長一尺、青瑩如玉、丹血爲文。佩符既畢、王母乃命一婦人人首鳥身、謂帝曰我九天玄女⁴⁵也。授帝以三宮⁴⁶五意、陰陽之畧、太一遁甲六壬步斗之術、陰符之機、靈寶五符五勝之文。遂克蚩尤於中冀、剪神農之後、誅榆罔於版泉⁴⁷、而天下大定。都於上谷之涿鹿⁴⁸。又數年、王母遣使白虎之神、乘白虎⁴⁹、集帝之庭、授以地圖。

(書き下し)

昔黄帝蚩尤の暴威を討つも、未だ禁ぜざる所あり。蚩尤は幻化すること多方、風を微し雨を召し、煙を吹き霧を噴く。師衆は大ひに迷ふ。帝歸りて太山の阿に息ふ。昏然として憂寐す。王母使ひを遣はし、玄狐の裘を披し、符を以て帝に授けしむ。曰く「太一は前に在り。之を得る者は勝ち、戦へば則ち克つ」と。符は廣さ三寸、長さ一尺、青瑩として玉の如く、丹血もて文を爲す。符を佩びて既に畢われば、王母乃ち一婦人の人首鳥身なるに命じ、帝に謂ひて曰く「我は九天玄女なり。帝に授くるに三宮五意、陰陽の畧、太一遁甲六壬步斗の術、陰符の機、靈寶五符五勝の文を以てす」と。遂に蚩尤に中冀に克ち、神農の後を剪り、榆罔を版泉に誅して、天下大ひに定まる。上谷の涿鹿に都す。又、數年にして、王母使ひを白虎の神に遣はし、白虎に乗りて、帝の庭に集めしめ、授くるに地圖を以てす。

(訳)

昔黄帝は蚩尤の暴拳を討つたが、禁圧することができなかった。蚩尤は様々な方法を用いて幻惑したが、風を呼び雨を呼び、煙を吹き霧を噴いたりした。兵士たちは大いに迷った。帝は帰って太山の阿

に休んだ。ぐったり疲れ果て憂えて横たわった。王母は使いを遣わして、玄狐の皮衣を被り、符を帝に授けた。次のように言った。太一が前にひかえている。この符を得る者は勝ち、戦えば勝つ」と。符は広さ三寸、長さ一尺、青い光をはなつ玉のようで、丹血によって文字を書いていた。符を腰にさげてすっかり準備がおわると、王母はそこで一人の人首鳥身の婦人に命じ、帝に次のように言わせた。「私は九天玄女である。帝に三宮五意、陰陽の畧、太一遁甲六壬歩斗の術、陰符の機、靈宝五符五勝の文を授けよう」と。遂に蚩尤に中冀で克ち、神農の子孫を滅ぼし、榆罔を版泉で殺し、天下は大いに定まった。上谷の涿鹿に都を定めた。また数年して、王母は使いを白虎の神に遣わし、白虎に乗り、帝の庭に集らせ、地図を授けた。

(原文)

晩年復授帝以清静無爲正眞之道。其辭曰、飲啄不止、身不輕。思慮不止、神不清。聲色不止、心不寧。心不寧則神不靈。神不靈則不道。其要妙也、不在瞻星、禮斗、苦己、勞形。貴在湛然方寸、無所營營神仙之道。乃可長生⁵⁰。其後虞舜攝位。王母遣使、授舜白玉環⁵¹。又授益地圖⁵²、遂廣黃帝之九州⁵³、爲十有二州⁵⁴。王母又使遣、授舜皇瑄⁵⁵、吹之以和八風。⁵⁶

(書き下し)

晩年復た帝に授くるに清静無爲正眞の道を以てす。其の辭に曰く「飲啄止めざれば、身輕からず。思慮止めざれば、神清からず。聲色止めざれば、心寧らかならず。心寧からざれば則ち神靈ならず。神靈ならざれば則ち道ならず。其の要妙や、星を瞻、斗を礼し、己を苦しめ、形を勞するに在らず。貴きは方寸を湛然にし、神仙の道に營營とする所無きに在り。乃ち長生すべし」と。其の後、虞舜位を攝る。王母使ひを遣はし、舜に白玉の環を授けしむ。又地圖を授益し、遂に黃帝の九州を廣げて、十有二州と爲す。王母又使ひを遣はし、舜に皇瑄を授け、之を吹きて以て八風を和せしむ。

(訳)

晩年また帝に清静無爲正眞の道を授けた。其の辭に次のように言う。「飲食することを止めなければ、身は軽くならない。思慮すること止めなければ、神は清くならない。音楽と女色を止めなければ、心は安らかにならない。心が安らかでなければ、神はあらたかとならない。神があらたかでなければ道は達成できない。その奥深い要訣は、星を仰ぎ見て北斗を礼拝し、己れを苦しめ肉体を疲れさすことにはない。貴ぶべきは心をゆったりとして、神仙の道を求めてあ

くせくするところがないことにある。そうすれば長生することができる」と。その後、虞舜は位についた。王母は使いを遣わし、舜に白玉環を授けた。又地図を増し授け、遂に黄帝の九州を広げ、十二州とした。王母は又使いを遣わし、舜に皇瑄を授け、之を吹いて八風を調和させた。

(原文)

周昭王二十五年、歳、在乙卯。老君與真人尹喜⁵⁷遊觀八紘⁵⁸之外、西遊龜臺、爲西王母說常清淨經⁵⁹。故太極左官仙葛玄、⁶⁰序曰吾昔受之於東華帝君。東華帝君受之於金闕帝君。金闕帝君受之於西王母。皆口口相傳、不記文字。吾今於世書而録之。

(書き下し)

周の昭王二十五年、歳、乙卯に在り。老君真人尹喜と八紘の外に遊観し、西のかた龜臺に遊び、西王母の爲に『常清淨経』を説く。故に太極左官仙葛玄、序して曰く「吾昔之を東華帝君に受く。東華帝君は之を金闕帝君に受く。金闕帝君は之を西王母に受く。皆口口に相伝え、文字を記さず。吾今世において書して之を録す」と。

(訳)

周の昭王二十五年、歳星は乙卯に在った。老君は真人尹喜と八紘の外に遊観し、西方の龜台に遊び、西王母のために『常清淨経』を説いた。そこで太極左官仙葛玄は、その序を書いて次のようにいう。「私は昔これ(常清淨経)を東華帝君(東王公)に授かった。東華帝君は之を金闕帝君に授かった。金闕帝君は之を西王母に授かった。皆、口伝して文字に記録しなかった。私は今この世において、文字で表して記録した」と。

(原文)

逮至穆王命、駕八駿⁶¹之乘、右服驪驪而左緑耳、右驂赤驥而左白梁。主車則造父爲御、高尙爲右。次車之乘、右服渠黄而左踰輪、左驂盜驪而右山子。柏夭⁶²主車、參百爲御、奔戎爲右。馳驅千里、而至巨蒐⁶³氏之國。巨蒐氏乃獻白鵠⁶⁴之血以飲王。具牛馬之瀆以洗王之足。及二乘之人、已飲而行。遂宿于崑崙之河赤水之陽。別日昇崑崙之丘、以觀黄帝之宮。而封之以詒後世。遂賓于西王母、觴于瑤池之上。西王母爲王謠。王和之。其詞哀焉。迺觀日之所入。一日行萬里。王乃歎曰予一人不盈於德。後世其追數吾過乎。又云、王持白珪重錦、以爲王母壽、歌白雲之謠。刻石紀迹于崑山之上而還⁶⁵。紀年云穆王十七年西征、

見西王母賓于昭宮。

(書き下し)

穆王命ずるに至るに逮び、八駿の乘に駕し、右に驊騮を服し緑耳を左にし、右に赤驥を驂して白梁を左にす。主車は則ち造父を御と爲し、鬲尙を右と爲す。次車の乗は、右に渠黄を服し踰輪を左にし、左に盜驪を驂して山子を右にす。柏夭の主車は、參百を御と爲し、奔戎を右と爲す。千里を駆馳して、巨蒐氏の国に至る。巨蒐氏は乃ち白鵠の血を獻じて以て王に飲ましむ。牛馬の撞を具えて以て王の足を洗ふ。二乗の人、已に飲むに及びて行く。遂に崑崙の河、赤水の陽に宿る。別日崑崙の丘に昇り、以て黄帝の宮を觀る。而して之を封じて以て後世に誥す。遂に西王母に賓し、瑤池の上に觴す。西王母王の爲に謡ふ。王之に和す。其の詞哀し。迺ち日の入る所を觀る。一日行くこと萬里。王乃ち歎じて曰く「予一人徳を盈たさず。後世其れ吾が過を追數せんか」と。又云ふ、王白珪重錦を持して、以て王母の壽を爲して、白雲の謡を歌ふ。石に刻して迹を兪山の上に紀して還る。『紀年』に云う「穆王十七年西征し、西王母に見え昭宮に賓す」と。

(訳)

穆王が命じると、八頭立ての駿馬の馬車に乗り、右に驊騮を、左に緑耳を従えた。右に赤驥を左に白梁を添え馬とした。主車は造父

が御者となり、鬲尙を右にした。次車は、右に渠黄を左に踰輪を従え、左に盜驪を左に山子を添え馬とした。柏夭の主車は、參百が御者となり、奔戎を右に従えた。千里を駆け馳せ、巨蒐氏の国に至った。巨蒐氏はそこで白鵠の血を獻じ、王に飲ませた。牛馬の撞を具えて王の足を洗い、二台の馬車に乗っていた人が飲み終わると出發した。崑崙のふもとを流れる赤水の北岸に宿った。別の日、崑崙の丘に昇り、黄帝の宮を觀た。これに領地を与えて後世に残した。遂に西王母のもとに賓客となり、瑤池のほとりで酒を酌み交わした。西王母は王のために謡った。王は之に唱和した。その詞は悲しいものであった。その後、日の入る所を觀た。一日に万里進んだ。王はそこで嘆いて「私は一人徳を満たしていない。後世私の過ちを追求するだろう」と言った。また、王は白珪と重錦を手に持ち、王母の長寿を祈り白雲の謡を歌った。石に刻み足跡を兪山の上に記して帰った。『紀年』に「穆王十七年に西方へ征き、西王母に会い昭宮に招かれた」とある。

(原文)

世之昇天之仙、凡有九品。第一上仙、號九天⁶⁶眞王。第二次仙、號三天眞皇。第三號太上眞人。第四號飛天眞人。第五號靈仙。第六號眞人。第七號靈人。第八號飛仙。第九號仙人。凡此品次、不可差越。然其昇天之時、先拜木公、後謁金母、受事既訖、方得昇九天、入三

清⁶⁷、拜太上、觀奉元始天尊⁶⁸耳。故漢初有四五小兒。戲於路中。一兒歌曰著青裙、入天門、揖金母、拜木公。時人莫知之、惟張子房知之。乃往拜焉。曰此乃東王公之玉童也。⁶⁹仙人得道昇天、當揖金母、而拜木公。自非沖虛登眞之子、莫知其津矣。

(書き下し)

世の昇天の仙には、凡そ九品有り。第一は上仙、九天眞王と號す。第二は次仙、三天眞皇と號す。第三は太上眞人と號す。第四は飛天眞人と號す。第五は靈仙と號す。第六は眞人と號す。第七は靈人と號す。第八は飛仙と號す。第九は仙人と號す。凡そ此の品次は、差越すべからず。然れども其れ昇天の時は、先づ木公に拝し、後に金母に謁し、事を受けて既に訖はりて、はじめて九天に昇り、三清に入り、太上に拝し、元始天尊に觀奉するを得るのみ。故に漢初に四五の小兒有り。路中に戯る。一兒歌ひて曰く「青裙を著け、天門に入り、金母に揖し、木公に拝す」と。時人之を知る莫く、惟だ張子房のみ之を知る。乃ち往きてこれに拝す。曰く「此れ乃ち東王公の玉童なり」と。仙人道を得て天に昇らば、當に金母に揖し、木公に拝すべし。沖虛登眞の子に非ざるよりは、其の津を知る莫し。

(訳)

世の昇天の神仙には、全部で九品ある。第一は上仙、九天眞王と号す。第二は次仙、三天眞皇と号す。第三は太上眞人と号す。第四は飛天眞人と号す。第五は靈仙と号す。第六は眞人と号す。第七は靈人と号す。第八は飛仙と号す。第九は仙人と号す。この品次は、順番をはずして越えることはできない。いずれの場合も昇天の時は、先づ木公に拝礼し、後に金母に謁見し、なすべき事柄を受け終わり、はじめて九天に昇り、三清に入り、太上に拝礼し、元始天尊に謁見することが出来る。昔、漢初に四、五人の子供が路上で戯れていた。一人の児が「青い袴を付け、天門に入り、金母に拝礼し、木公に拝礼す」と歌った。当時の人は、この童謡の意味が分からなかったが、ただ張子房だけがこのことを知っていた。そこで、行って子供に拝礼して、「この方こそが東王公の玉童である」と言った。仙人は道を得て天に昇ったならば、金母に拝礼し、木公に拝礼すべきである。まことに道を得たものでなければ、神仙世界の入口を知らない。

(原文)

漢武帝⁷⁰、好長生之道。以元封元年、登高高之嶽⁷¹、築尋眞之臺、齋⁷²戒精思⁷³。四月戊辰、王母使壙城玉女王子登⁷⁴來。語帝曰聞子欲輕四海之祿、迂萬乘之貴、以求長生。眞乎勤哉。七月七日、吾來、暫來

也⁷⁵。帝問東方朔⁷⁶、審其神應。乃清齋百日、焚香宮中。夜二唱⁷⁷後、白雲起于西南、鬱鬱而至、徑趨宮庭。漸近則雲霞九色、簫鼓震空。龍鳳人馬之衆、乘麟駕鹿之衛、科車天馬、霓旂羽幢、千乘萬騎、光耀宮闕。大仙從官、森羅億衆、皆長丈餘。既至從官所在⁷⁸。王母乘紫雲之輦、駕九色斑龍、帶天真之策、佩金剛靈璽。黃錦之服、文彩鮮明、金光奕奕。腰分景色之劍、結飛雲大綬。頭上華髻、戴太真晨纓之冠、躡方瓊鳳文之履。可年二十許。天姿奄靄、靈顏絕世、真靈人也。下車二女扶持、登牀東向而坐。帝拜、跪問寒温、侍立良久。呼帝使坐。設以天厨芳華百菓、紫芝萎蕊。紛若瑱精。珍異常⁷⁹、非世所有。帝不能名也。又命侍女取桃、玉盤盛七枚。大如鵝子。四以與帝、母自食三。帝食桃輒取其核。母問何爲。帝曰欲種之爾⁸⁰。母曰此桃三千歲一實。中國土地薄種之不生⁸¹。於是、命王子登彈八珍之璈⁸²、董雙成⁸³吹雲和之笙、石公子擊昆廷之玉、許飛瓊鼓震靈之簧、婉凌華拊吾陵之石⁸⁴、范成君拍洞陰之磬、段安香作九天之鈞、法嬰歌玄靈之曲。衆聲激清、朗音駭空⁸⁵。歌畢、帝下席叩頭、以問長生之道、王母曰汝能賤榮樂卑、孰虚味道、自復佳爾⁸⁶。然汝性恣體慾、淫亂過甚。殺伐非法、奢侈恣性⁸⁷。夫侈者、裂身之具也⁸⁸。淫者、破身之斧也。殺者響對、奢者心爛。積欲則神殞、聚穢則命斷。以子慕爾之身、而宅殘形之賊、盈尺之材、而攻之者百刃⁸⁹。欲以解脫三尸⁹⁰全身永久不可得也。有似無翹之鷄、願鼓天池、朝生之菌而樂春秋者

也⁹¹。若能蕩此衆亂、撥穢、易意、保神氣於絳府⁹²、閉瑤宮不開、靜奢侈以寂室⁹³、愛衆生而不危、守慈務施、煉氣惜精。倘有若斯之事、豈無髣髴邪⁹⁴。若不爾者、譬如抱石、而濟長河爾⁹⁵。帝跪受王母之誠曰徹不才、沈淪流俗。承禪先業、遂羈世累。刑政乖繆⁹⁶罪積丘山。今日之後、請事斯語矣。

(書き下し)

漢の武帝、長生の道を好む。元封元年を以て、嵩高の嶽に登り、尋眞の臺を築き、齋戒精思す。四月戊辰、王母壙城の玉女王子登をして来たらしむ。帝に語けて曰く「聞くならず、子は四海の祿を輕んじ、萬乗の貴を迂み、以て長生を求めんと欲す、と。眞なるかな。勤むるかな。七月七日、吾來らば、暫く來たれ」と。帝は東方朔に問ひ、其の神応を審らかにす。乃ち清齋すること百日、香を宮中に焚く。夜、二唱(二更)の後、白雲西南に起り、鬱鬱として至り、徑ちに宮庭に趨る。漸く近づけば則ち雲霞は九色にして、簫鼓は空を震わす。龍鳳人馬の衆、麟に乗り鹿に駕するの衛、科車天馬、霓旂羽幢、千乘萬騎、宮闕を光耀す。大仙從官、森羅億衆は、皆長丈餘、既に從官の在る所に至る。王母は紫雲の輦に乗り、九色の斑龍に駕し、天眞の策を帯び、金剛の靈璽を佩ぶ。黃錦の服は、文彩鮮明にして、金光奕奕たり。腰には景色の劍を分かち、飛雲の大綬

を結ぶ。頭上は華髻にして、太眞晨纓の冠を戴き、方瓊鳳文の履を躡く。年は二十許りなるべし。天姿は奄靄にして、靈顔は絶世にして眞に靈人なり。車を下だるに二女扶持し、牀に登り東向して坐す。帝拜し、跪きて寒温を問ひ、侍立すること良久し。帝を呼びて坐せしむ。設くるに天厨の芳華百菓、紫芝萎蕊を以てす。紛として瑱精の若し。珍なること常に異なり、世に有る所に非ず。帝は名すること能わざるなり。又侍女に命じて桃を取らしめ、玉盤に七枚を盛ること大なること餽子の如し。四つ以て帝に與へ、母は自ら三つを食らふ。帝は桃を食へば輒ち其の核を収む。母問ふ、何をか爲すと。帝曰く「之を種えんと欲するのみ」と。母曰く「此の桃は三千歳に一たび實る。中國は土地薄くして之を種うるも生ぜざらん」と。是において、王子登に命じて八珍の璫を弾かしめ、董双成をして雲和の笙を吹かしめ、石公子をして昆廷の玉を撃たしめ、許飛瓊をして震靈の簧を鼓せしめ、婉凌華をして吾陵の石を拊しめ、范成君をして洞陰の磬を拍たしめ、段安香をして九天の鈞を作さしめ、法嬰をして玄靈の曲を歌はしむ。衆聲激清にして、朗音空に駭く。歌ひ畢はり、帝は席より下りて叩頭す。以て長生の道を問ふ。王母曰く「汝、能く榮を賤しみ卑を楽しみ、虚に耽り道を味わひ、自ら復た佳きのみ。然れども汝は性、體慾を恣いままにし、淫亂過ぐるること甚だし。殺伐は法にあらず、奢侈は性を恣いままにす。夫れ侈は、身を裂く具

なり。淫は、身を破る斧なり。殺す者は響對し、奢る者は心爛る。慾を積まば則ち神は殞たれ、穢を聚むれば則ち命は斷たる。子の叢爾の身を以て、殘形の賊を宅まはせ、盈尺の材にして之を攻むる者は百刃なり。以て三尸を解脱し身を全くせんと欲するも永久に得べからざるなり。無翅の鷄にして、天池に鼓するを願ひ、朝生の菌にして春秋を樂ふ者に似たる有り。若し能く此の衆亂を蕩い、穢を撥ひ、意を易へんとせば、神氣を絳府に保ち、瑤宮を閉ざして開かず、奢侈を靜むるに寂室を以てし、衆生を愛して危うからざらしめ、慈を守りて施しに務め、氣を煉りて精を惜しめ。尚し斯くの若きこと有らば、豈に髻髻無からん。若し爾らずんば、譬へば石を抱き、長河を濟るが如きのみ」と。帝、跪きて王母の誠を受けて曰く「徹、不才にして、流俗に沈淪す。先業を禪承し、遂に世累に羈がる。刑政は乖繆して罪は丘山に積む。今日の後、請ふ斯の語を事とせん」と。

(訳)

漢の武帝は、長生の道を好んだ。元封元年(前一〇年)、嵩高山に登り、尋眞の台を築き、齋戒精思した。四月戊辰、王母は墟城の玉女である王子登を来させた。帝に語っていった、「そなたは、天下の財を輕視し、天子の位を疎み、長生を求めていると聞いた。ま

ことに励んでいることよ。七月七日にわたしが来るので、そなたも来なさい」と。武帝は東方朔に尋ね、その神応を審らかにした。そこで清齋すること百日、香を宮中に焚いた。夜、二更の後、白雲が西南に起こり、もくもくとして至り、まっすぐに宮中に流れ込んだ。ようやく近づけば雲霞は九色であり、簫鼓は空を震わせた。龍鳳人馬の衆、麟に乗り鹿に乗っている衛兵、科車天馬、霓旂羽幢が連なり、千乗萬騎が宮殿を照り輝かせた。大仙や従官、多くのものたちは、皆身の丈が一丈余りで、既に従官のいる場所についた。王母は紫雲の輦に乗り、九色の斑龍に乗り、天真の策を帯び、金剛のあらたかな璽を腰にさげていた。黄錦の服は、色彩や模様が鮮やかであり、光輝いていた。景色の劔を腰にさげ、飛雲の大綬を結んでいた。頭上の華髻には太真晨纓の冠を戴き、方瓊鳳文の靴を履いていた。年は二十歳ぐらいであった。天姿はおぼろげで、靈顔はこの世のものとは思えず、真に靈人であった。車から下りるとき、二人の侍女は手を添えて手助けし、牀に登り東を向いて坐った。武帝は礼拝して跪き、時候のあいさつをし、暫く立っていた。武帝を呼んで坐らせた。天厨の様々な果物紫芝萎蕊を用意していた。まるで瑱精のようであった。普通にはない珍しいもので、この世に有るようなものではない。武帝は言葉で表現することができなかった。また、(西王母が)侍女に命じて桃を取らせ、玉盤に七つを盛らせた。大きさ

は、鶴の卵のようで、四つを武帝に与え、西王母は自ら三つを食べた。(武帝は)桃を食べると、そのたびごとにその種を収めた。西王母は、何をしているのかを尋ねた。武帝は、「これを植えようと思うのです」と言った。西王母は、「この桃は三千年に一度実をつけます。中国の土地は痩せていて植えても芽が出ないでしょう」と言った。そこで王子登に命じて、八珍の璫を弾かせ、董双成に雲和の笙を吹かせ、石公子に昆廷の玉を撃たせ、許飛瓊に震靈の簧を鼓させ、婉凌華に吾陵の石を拊たせ、范成君に洞陰の磬を拍たせ、段安香に九天の調べを作らせ、法嬰に玄靈の曲を歌わせた。衆声は勢いが激しく澄み渡り、朗音は空に轟いた。歌が畢むると、武帝は席から下りて、頭を地にたたきつけ、長生の道を尋ねた。王母は次のように言った。「そなたは、繁榮を賤しみ卑賤を楽しみ、虚にふけり道を好み、さながらまた立派なことである。けれども、そなたの性質は、肉欲をほしのままにし、淫乱に過ぎること甚だしい。非道にも人を殺し、道に外れ、本性のままに奢侈している。そもそも奢侈は、身を裂く道具である。淫乱は、身を破滅させる斧である。殺す者は自分に報いが返ってくるものであり、奢る者は心がただれる。欲を積めば精神がすたれ、穢れが集まれば命が断たれてしまう。そなたの小さい身に体を損なう賊を住まわせ、一尺あまりの材でありながら、これを攻めるものは百刃である。三尸虫を解脱させて体

を完全にしようとしても永久に得ることはできない。翹のない鶉が天池に羽ばたくことを願い、朝菌が長生きを願うのに似ている。もし、あらゆる乱れを静め、穢れを払い、気持を変えようと思うのなら、神気を神仙の世界に保ち、瑤宮を閉ざして開かず、静かな場所ので驕りを鎮め、衆生を愛して危険に陥れることはせず、慈悲の心を護り施すことに務め、気を煉りあげて精を惜しみなさい。もしこのようにできれば、どうして神仙の道を髣髴とさせないであろうか。もしそうでなければ、たとえば石を抱いて、長河を渡るようなものである」と。武帝は跪いて西王母の戒めを受け、「私、徹は才能も無く、俗世間に沈没しております。先代の事業を譲り受け、遂にわずらわしい世の中に繋がれてしまいました。刑罰と政治はちぐはぐで、罪は山のごとく積み上げております。今日から後は、この言葉を大切にしたいと思えます」と言った。

(原文)

王母曰夫養性之道、理身之要、汝固知矣。但在勤行不怠也。我師元始天王昔於嚴霄之臺、授我要言曰、欲長生者、取諸身⁹⁷、堅守三一⁹⁸。保靈根⁹⁹、玄谷¹⁰⁰、華體、灌沈珍、既長¹⁰¹、清精、入天門¹⁰²、金室、¹⁰³宛轉在中關¹⁰⁴。青白分明適泥丸¹⁰⁵、養液閉精、具身神三宮¹⁰⁶、備衛存絳宮¹⁰⁷、黃庭¹⁰⁸、戊巳無流源、徹通五藏¹⁰⁹十二輪、吐納六府¹¹⁰魂魄、欣却百

病辟熱寒¹¹¹、保精留命永長存。此所謂呼太和、保守自然¹¹²。眞要道者也。凡人爲之、皆必長生。亦可役使鬼神、遊戲五嶽。但不得飛空騰虛而已。汝能爲之、足可度世也。夫學仙者、未有不由此而始也。至若太上靈藥、上帝奇物也¹¹³。下陰生重雲妙草¹¹⁴。皆神仙之藥也。得上品者、後天而老。乃太上之所服、非下仙之所逮¹¹⁵。其次藥、有九丹¹¹⁶、金液、紫華虹英、太清九轉¹¹⁷、五雲¹¹⁸之漿¹¹⁹、玄霜¹²⁰絳雪¹²¹、騰躍三黃¹²²、東瀛¹²³白¹²⁴香、玄洲飛¹²⁵生、八石¹²⁶千芝、威喜九光¹²⁷、西流石膽¹²⁸、東滄青錢¹²⁹、高丘余糧¹³⁰、積石瓊田¹³¹、太虛還丹¹³²。盛以金蘭、長光絳草、雪童飛干¹³³。有得服之、白日昇天¹³⁴。此飛仙之所服、非地仙之所聞。其下藥有松栢之膏、山姜、沈精、菊華、澤瀉、枸杞、茯苓、菖蒲、門冬、巨勝¹³⁵、黃精、靈飛、赤板、桃膠、木英、升麻、續斷、威蕤、黃連。如此下藥、略舉其端。草類繁多、名數有千。子得服之、可以延年。雖不能長享無期、上昇青天、亦可以身生光澤、返老童顏、役使群鬼。得爲地仙。求道之者¹³⁶、要先憑此階、漸以入乎妙也¹³⁷。若能呼吸、御精、保固神氣、精不脫則永久。氣長存則不死。不用藥石之費、又無營索之勞、取之於身爾¹³⁸。百姓日用不知¹³⁹。故爲上品自然之要也。且夫一人之身、天付之以神、地付之以形、道付之以氣。氣存則生、氣去則死、萬物草木、亦皆知之¹⁴⁰。身以道爲本。豈可不養神、固氣、全爾形也¹⁴¹。形神俱全、上聖所貴。形滅神逝、豈不痛哉。一失此身、萬劫難復。子其寶焉。我之所言乃我師元始天王所授之辭也¹⁴²。

即勅玉女李慶孫書、出之以付於帝曰汝善修之焉¹⁴³。王母命駕將去。帝下席、叩頭請留。王母即命侍女、召上元夫人¹⁴⁴、同降帝宮。良久、上元夫人至、復坐、設天厨。久之、王母命夫人出八會之書¹⁴⁵、五嶽眞形¹⁴⁶、五帝六甲靈飛之符、凡十二事。云此書、天上四萬劫一傳。若在人間、四十年可授有道之士。王母乃命侍女宋靈賓開雲錦之囊、取一冊以授帝。王母執書、起立以付帝。王母呪曰、天尊地卑¹⁴⁷。五嶽眞形¹⁴⁸。元眞激氣、大澤玄精¹⁴⁹。天回九道、六和長平、太上八會、飛天之成、眞仙節信¹⁵⁰、由茲通靈。泄墜滅府、寶歸長齡¹⁵¹。徹其慎之。敢告劉生。祝畢。帝拜受之。王母曰夫始學道受符者、宜別祭川嶽諸眞靈、潔齋而佩之焉。四十年後、若將傳付汝之所友董仲君李少君¹⁵²可校之爾¹⁵³。況爲帝王、可勤祭川嶽、以安國家、授簡眞靈、以安黎庶也¹⁵⁴。言訖、與上元夫人命車言去。從官互集、將欲登天。因笑指東方朔¹⁵⁵此我隣家小兒、性多滑稽。曾三來偷桃矣。昔爲太上仙官、因沈涵于玉酒、失部御之和。謫佐於汝、非流俗之夫也。

(書き下し)

王母曰く「夫れ養性の道、身を理むるの要は、汝は固より知れり。但だ勤行して怠らざるに在るなり。我師元始天王は昔嚴誓の臺において、我に要言を授けて曰く「長生を欲する者は、諸れを身に取り、堅く三一を守る。靈根、玄谷、華體を保つ。沈珍に灌ぎ、既に清精

を長じ、天門、金室に入り、宛轉して中關に在り。青白は分明し、泥丸に適き、液を養いて精を閉じ、身神を三宮に具へ、備衛して絳宮黃庭に存し、無流の源を成り已り、五藏十二輪を徹通し、六府魂魄に吐納し、欣びて百病を却けて熱寒を辟し、精を保ち命を留めて永く長存す。此れ所謂太和を呼び、自然を保守するなり。眞に道を要むる者なり。凡そ人は之を爲せば、皆必ず長生す。亦鬼神を役使して、五嶽に遊戯すべし。但だ空を飛びて虚に騰がるを得ざるのみ。汝能く之を爲さば、世を度るべきに足るなり。夫れ仙を學ぶものは、未だ此れに由らずして始むるもの有らざるなり。太上靈薬の若きに至りては、上帝の奇物なり。下陰に重雲妙草を生ず。皆神仙の薬なり。上品を得るものは、後天にして老ゆ。乃ち太上の服する所は、下仙の逮ぶ所に非ず。其の次薬に、九丹金液、紫華虹英、太清九轉、五雲之漿、玄霜絳雪、騰躍三黄、東瀛の白香、玄洲の飛生、八石千芝、威喜九光、西流の石膽、東滄の青錢、高丘の余粮、積石の瓊田、太虚の還丹有り。盛るに金蘭、長光絳草、雪童飛干を以てす。之を服するを得る有らば、白日昇天す。此れ飛仙の服する所にして、地仙の聞く所に非ず。其の下薬に松柏の膏、山姜、沈精、菊華、澤瀉、枸杞、茯苓、菖蒲、門冬、巨勝、黄精、靈飛、赤板、桃膠、木英、升麻、續斷、威蕤、黄連有り。此くの如きの下薬は、其の端を略挙す。草類、繁多にして、名數千有り。子之を服するを得ば、以て年

を延ばすべし。長享無期にして、青天に上昇すること能はずと雖も、亦以て身に光澤を生じ、老を返し童顔にして、群鬼を役使すべし。地仙と為るを得ん。道を求むるの者は、要す先づ此の階に憑り、漸く以て妙に入るなり。若し能く呼吸し、精を御して、神氣を保固し、精脱せざれば則ち永久ならん。氣長存すれば則ち死せず。薬石の費を用いず、又營索の勞無く、之を身に取るのみ。百姓日び用いて此れを知らず。故に上品自然の要と爲すなり。且つ夫れ一人の身、天は之に付するに神を以てし、地は之に付するに形を以てし、道は之に付するに氣を以てす。氣存すれば則ち生き、氣去らば則ち死す。萬物草木は、亦皆之を知る。身は道を以て本と爲す。豈に神を養ひ、氣を固め、爾の形を全くせざるべけんや。形神俱に全くするは、上聖の貴ぶ所なり。形滅し神逝くは、豈に痛しからずや。一たび此の身を失はば、萬劫に復し難し。子は其れ焉を寶とせよ。我の言ふ所は乃ち我師元始天王の授くる所の辞なり」と。即ち玉女李慶孫に勅して書せしめ、之を出して以て帝に付せしめて曰く「汝善く之を修めよ」と。王母は駕を命じて將に去らんとす。帝は席を下りて、叩頭して留まらんことを請ふ。王母は即ち侍女に命じて、上元夫人を召し、共に帝宮に降らしむ。良久しくして、上元夫人至り、復た坐し、天厨を設く。之を久しくして、王母は夫人に命じて『八會の書』、『五嶽眞形』、『五帝六甲靈飛の符』、凡そ十二事を出さしむ。云く、

「此の書は、天上四萬劫に一たび傳ふ。若し人間に在らば、四十年にして有道の士に授くべし」と。王母は乃ち侍女宋靈賓に命じて雲錦の囊を開き、一冊を取りて以て帝に授けしむ。王母は書を執り、起立して以て帝に付す。王母は呪して曰く「天尊地卑。五嶽眞形。元眞激氣、大澤玄精。天回九道、六和長平、太上八會、飛天之成、眞仙節信、由茲通靈。泄墜滅府、寶歸長齡。徹其慎之。敢告劉生」と。祝し畢はる。帝拜して之を受く。王母曰く「夫れ始めて道を學び、符を受くる者は、宜しく別に川嶽の諸眞靈を祭り、潔齋して之を佩ぶべし。四十年の後、若し將に汝の友とする所の董仲君、李少君に傳付せんとすれば、之を校す可きのみ。況はんや帝王爲りて、勤めて川嶽を祭り、以て國家を安んじ、簡を眞靈に授けて、以て黎庶を安んずるをや」と。言ひ訖はり、上元夫人と車を命じて去らんと言ふ。從官互ひに集まり、將に天に登らんと欲す。因りて東方朔を指して「此れ我が隣家の小兒にして、性滑稽多し。曾て三たび來たりて桃を偷む。昔、太上の仙官爲るも、玉酒に沈湎するに因りて、部御の和を失う。謫されて汝を佐くるも、流俗の夫に非ざるなり」と。

(訳)

王母はいう、「そもそも命を養う道、身を修める要点については、

そなたはもとから知っている。ただ大事なことは勤め行い怠らないことである。私の師である元始天王は巖霄の台で私に重要な言葉を授けて言った。長生をしたいと願う者は、このことを身につけて、堅く三一を守れ。靈根、玄谷、華体を保て。沈珍に灌いで、清らかな精を生長させてから、天門、金室に入り、巡って中関にある。青白は分明にし、泥丸に適き、体液を養い精気を閉じ、身神を三宮に具え、しっかりと守って絳宮黄庭に存し、無流の源を守り終え、五藏十二輪を通り抜け、六府魂魄に吐納し、あらゆる病気を却けて、暑さ寒さを避け、精を保ち命を留め永く生存することを願へ。これこそいわゆる太和を呼び、自然を保守するということである。まことに道を求める者である。人はこのようなことをすれば、皆必ず長生する。また鬼神を使いこなして、五嶽に遊ぶことができる。但だ空を飛んで大空へと昇ることができないだけである。そなたは、これを修めれば、世を渡るには十分である。そもそも神仙の道を学ぶものは、このことに依らずに始めるものはない。太上靈薬ともなれば、上帝の奇物である。下陰に重雲妙草が生える。皆神仙の薬である。上薬を得るものは、長生きをしてから老いる。太上が服用するものは、下仙が手に入れることができるようなものではない。その次の薬に、九丹金液、紫華虹英、太清九転、五雲之漿、玄霜絳雪、騰躍三黄、東瀛の白香、玄洲の飛生、八石千芝、威喜九光、西流の

石膽、東滄の青錢、高丘の余粮、積石の瓊田、太虚の還丹などがある。金蘭、長光絳草、雪童飛干に盛る。これを服用すれば、白日昇天する。これらは飛仙が服用するものであって、地仙が聞いたことがないものである。その下の薬に松栢膏、山姜、沈精、菊華、澤瀉、枸杞、茯苓、菖蒲、門冬、巨勝、黄精、靈飛、赤板、桃膠、木英、升麻、続断、威蕤、黄連などがある。このような下薬は、ほぼその一端を挙げる。草類は繁多であつて、名前の数は千もある。そなたがこれらを服用すれば、年を延ばすことができる。限りなく長生して、昇天することができずとも、体に光沢を生じ、老いはね返して童顔となり、多くの鬼神を使いこなすことができる。地仙となることができる。道を求めるものは、必ずまずこの段階を経て、次第に奥深いところにはいることができるのである。もしうまく呼吸し、精を制御し、神気を保ち、精を放出しなければ長生するであろう。気を長く保つことができれば、死ぬことはない。薬石の費用を用いず、探す労力もいらず、これを身に付けるだけでよい。人々は日々用いているがこのことを知らない。だから上品で自然の要道なのである。かつ、そもそも一人の身は、天が神を付与し、地が形を付与し、道が気を付与す。気が保たれていると生き、気が去ってしまえば死ぬ。万物草木もまた同様のことを知ることができる。身は道の本とする。どうして神を養い、気を固め、そなたの身を完全なもの

にしないでよかろうか。形神が俱に完全であることは、上聖の貴ぶ所である。形が滅び神が逝くのは、何と痛ましいことではないか。一度この身を失えば、永久に再生することは難しい。そなたはその身を大切にしなさい。私が言うことはつまり私の師である元始天王が授けた言葉である」と。玉女李慶孫に命じて書かせ、これを帝に与えさせて「そなたはこれをよく修めなさい」と言った。王母は出発の準備を命じて去ろうとすると、武帝は、席を下りて、叩頭して留まるよう願い出た。王母はすぐに侍女に命じて、上元夫人を召し、ともに宮殿に降ってきた。しばらくしてから、上元夫人が至ると、また坐り、天厨を設けた。しばらくたつてから、王母は夫人に命じて、『八会の書』『五嶽真形』『五帝六甲靈飛の符』、全部で十二のものを出させた。それらには次のことが書かれていた。「この書は天上において四万年に一度伝えるものである。人間界においては、四十年に一度だけ道を得たものに授けることができる」と。王母はそこで侍女宋靈賓に命じて雲錦の囊を開けて、一冊を取って武帝に授けさせた。王母は書を手にもち、起ちあがって帝に与えた。王母は呪文を唱えていった「天尊地卑。五嶽真形。元眞激氣。大澤玄精。天回九道。六和長平。太上八會。飛天之成。眞仙節信。由茲通靈。泄墜滅府。寶歸長齡。徹其慎之。敢告劉生」と。祝し畢わると、武帝は礼拝してこれを授かった。王母は「そもそも始めて道を学び、符を

授かったものは、別々に山川のもろもろの靈を祭り、潔齋してこれを身につけるべきである。四十年の後、もしそなたの友人である、董仲君、李少君に伝えようとすれば、これを校閲することができるであろう。ましてや帝王であれば、勤めて川嶽を祭り、国家を安泰にし、書簡を真靈に授け、庶民を安寧にすべきことは言うまでもない。」と言った。言いおわると、上元夫人に出発の準備を命じて出かけようと言った。従官は互いに集まり、天に登ろうとした。笑つて東方朔を指差して次のように言った。「このものは私の隣家の小児であつて、いたずら好きである。かつて三度も桃を盗みに来た。昔、太上の仙官であつたが、酒に溺れ、部局を治めることができなかった。地上に流されてそなたを補佐しているが、世俗のただ者ではない」と。

(原文)

其後武帝不能用王母之戒、爲酒色所惑、殺伐不休。征遼東、擊朝鮮、通西南夷。築臺榭、興土木、海内愁怨、自此失道。幸回中臨東海、三祠王母、不復降焉。所受之書、置于柏梁臺上、爲天火所焚。李少君解形而去、東方朔飛翫不還。巫蠱事起¹⁵⁶、帝愈悔恨。元始二年、崩於五祚¹⁵⁷宮、葬于茂陵。其後、茂陵所藏道書五十餘卷、一旦出抱犢山中¹⁵⁸、又玉箱玉杖出於扶風市。驗茂陵、宛然如故、而箱杖出於

人間、徑不知其果何爲邪。 160

(書き下し)

其の後武帝は王母の戒を用いること能はず、酒色の惑はす所と爲り、殺伐休まず。遼東に征き、朝鮮を撃ち、西南の夷に通ず。臺榭を築き、土木を興し、海内は愁怨し、此れより道を失ふ。幸回中に東海に臨み、三たび王母を祠るも、復たびは降らず。受くる所の書は、柏梁臺の上に置き、天火の焚く所と爲る。李少君は形を解きて去り、東方朔は飛翥して還らず。巫蠱の事起り、帝は愈いよ悔恨す。元始二年、五祚宮に崩じ、茂陵に葬らる。其の後、茂陵に藏する所の道書五十餘卷、一旦抱犢山中に出で、又玉箱玉杖は扶風の市に出づ。茂陵を驗するも、宛然として故の如くにして、箱杖人間に出づるも、徑ちに其れ果たして何爲るかを知らず。

(訳)

その後武帝は王母の戒をもまることができず、酒色に惑わされ、殺伐は止まなかった。遼東に遠征し、朝鮮を撃ち、西南の夷に通じた。台榭を築き、土木工事を盛んに行ったため、天下は憂え怨み、この時から道を失った。巡幸して東海に臨み、三度王母を祠ったが、二度と降ってくることはなかった。授かった書は、柏梁台に置いたと

ころ、天火に焼かれてしまった。李少君は尸解仙となって去り、東方朔は飛んでいき帰ってこなかった。巫蠱の事件が起こり、武帝はますます後悔した。元始二年(前八七)、五祚宮で亡くなり、茂陵に葬られた。その後、茂陵に葬った道書五十餘卷が、ある日抱犢山中で見つかり、また、玉箱玉杖が扶風の市場で見つかった。茂陵を調べたがもとのままであり、箱と杖が俗世間で見つかったが、すぐにそれが何であるかは分からなかった。

(原文)

茅君盈¹⁶¹、字叔申、從西城王君¹⁶²、詣白玉龜臺、朝謁王母、求乞長生之道曰¹⁶³盈以不肖之軀、慕龍鳳之年、以朝菌之求、脆積朔之期¹⁶⁴。王母愍其勤志、告之曰、吾昔師元始天王及皇天搏桑帝君¹⁶⁵。授我以玉珮金璫二景¹⁶⁶。纏練之道、上行太極¹⁶⁷、下造十方¹⁶⁸、漑月咀日、以入天門¹⁶⁹。名曰玄真之經。今以授爾。宜勤修焉。因勅西城王君、一一解釋以授之。并授寶書四童散方。後茅君¹⁷⁰南治句曲之山¹⁷¹。

(書き下し)

茅君盈、字は叔申、西城王君に従ひ、白玉龜臺に詣り、王母に朝謁し、長生の道を求乞して曰く「盈、不肖のを以て、龍鳳の年を慕ひ、朝菌の脆きを以て、積朔の期を求む」と。王母は其の勤志を愍み、

之に告げて曰く「吾は昔元始天王及び皇天搏桑帝君を師とす。我に授くるに玉珮金璫二景を以てす。纏練の道は、上は太極に行き、下は十方に造る。月に漑ぎ日を咀み、以て天門に入る。名づけて『玄真之経』と曰ふ。今以て爾に授く。宜しく勤修すべし」と。因て西城王君に勅して、一一解釋して以て之れを授けしむ。并せて宝書『四童散方』を授く。後茅君は南のかた句曲の山を治む。

(訳)

茅君盈は、字は叔申、西城王君に従つて、白玉亀台にいたり、王母に謁見し、長生の道を求めて言った。「私盈は、愚かなこの身で、龍や鳳凰の年にこいこがれ、朝菌のはかない身で、長生きを求めております」と。王母はそのねんごろな志を憐れみ、これに告げて言った。「私は昔元始天王及び皇天搏桑帝君に師事した。私に玉珮と金璫、二景を授けてくれた。鍛錬の方法は、上は太極に行き、下は十方に至り、月光を身に浴び、日光を口に咀み、天門に入った。『玄真之経』と名づける書を今そなたに授けよう。努力しなさい」と。因て西城王君に命じて、一一解釋させてこれを授けた。并せて宝書『四童散方』を授けた。後に茅君は南方の句曲山を治めた。

(原文)

哀帝元壽二年、八月巳酉¹⁷²、南嶽真人赤君、西城王君、方諸青童君¹⁷⁴、並從王母、降于茅君之室¹⁷⁵。頃之、天皇大帝遣繡衣使者¹⁷⁶冷廣子期、賜盈神璽玉策。太微帝君遣三天左宮御史¹⁷⁷管脩條、賜盈八龍錦輿、紫羽華衣。太上帝君遣協晨大夫石叔門、賜盈金虎真符、流金之鈴¹⁷⁸。金闕聖君命太極真人使正一上玄玉郎王忠、鮑丘等、賜盈以四節燕胎流明神芝。四使者、授訖、使盈佩璽¹⁷⁹、服衣正冠、帶符握鈴而立。四使者、告盈曰食四節隱芝者、位爲真卿。食金闕玉芝者、位爲司命。食流明金英者、位爲司祿、食長曜雙飛者位爲真伯、食夜光洞草者、總主左右御史之任。子盡食之矣、壽齊天地、位爲司命、授東嶽上卿、統吳越之神仙、綜江左之山源矣。言畢使者俱去。五帝君各以方面車服、降於其庭、傳大帝之命、賜盈紫玉之版、黃金刻書、九錫之文。拜盈、爲東嶽上卿司命真君太元真人。授事訖俱去。王母及盈師、西城王君、爲盈設天厨。酣宴、歌玄靈之曲。宴罷、王母攜王君及盈、省顧盈之二弟¹⁸⁰、各授道要。王母命上元夫人、授茅固、衷太霄隱書丹景道精等四部寶經。王母執太霄隱書、命侍女張靈子執交信之盟、以授于盈、固及衷。事訖、王母昇天而去¹⁸¹。

(書き下し)

哀帝の元壽二年、八月巳酉、南嶽真人赤君、西城王君、方諸青童君、

並びに王母に従ひ、茅君の室に降だる。之を頃らくして、天皇大帝は繡衣の使者冷広子期を遣はし、盈に神璽玉策を賜ふ。太微帝君は三天左宮御史管脩條を遣はし、盈に八龍錦輿、紫羽華衣を賜ふ。

太上天道君は協晨大夫石叔門を遣はし、盈に金虎真符、流金の鈴を賜ふ。金闕聖君は太極真人に命じ、正一、上玄、玉郎、王忠、鮑丘等を遣はし、盈に賜ふに四節の燕胎、流明、神芝を以てす。四使者、授け訖はり、盈をして璽を佩び、衣を服し冠を正し、符を帯び鈴を握りて立たしむ。四使者、盈に告げて曰く「四節隱芝を食する者は、位は真卿と爲り、金闕玉芝を食する者は、位は司命と爲り、流明金英を食するものは、位は司祿と爲り、長曜雙飛を食する者は、位は真伯と爲り、夜光洞草を食する者は、左右御史の任を總主す。子は尽く之を食らへ。壽は天地に齊しく、位は司命と爲り、東嶽上卿を授かり、呉越の神仙を統べ、江左の山源を綜べん」と。言ひ畢はりて、使者は俱に去る。五帝君は各々方面の車服を以て其の庭に降り、大帝の命を傳へ、盈に紫玉の版、黄金の刻書、九錫の文を賜ふ。盈を拜せしめて、東嶽上卿司命真君太元真人と爲す。事を授け訖はりて俱に去る。王母及び盈の師、西城王君は、盈の爲に天厨を設く。酣宴にして玄靈の曲を歌ふ。宴罷りて、王母は王君及び盈を攜へ、盈の二弟を省顧し、各々道要を授く。王母は上元夫人に命じて、茅固と衷に『太霄隱書』『丹景道精』等の四部の寶經を授けしむ。王

母は『太霄隱書』を執り、侍女張靈子に命じて交信の盟を執り、以て盈、固及び衷に授けしむ。事訖はり、王母天に昇りて去る。

(訳)

哀帝元寿二年(前一年)八月巳酉、南嶽真人赤君、西城王君、方諸青童君は、みな王母に従ひ、茅君の室に降つた。しばらくして、天皇大帝は、繡衣を着用した使者、冷広子期を遣わし、盈に神璽玉策を授けた。太微帝君は三天左宮御史、管脩條を遣わし、盈に八龍錦輿、紫羽華衣を授けた。太上天道君は協晨大夫である石叔門を遣わし、盈に金虎真符、流金の鈴を授けた。金闕聖君は太極真人に命じて、正一、上玄、玉郎、王忠、鮑丘等を遣わし、盈に四節の燕胎、流明、神芝を授けた。四人の使者は、授け終わると、盈に璽を腰にさげさせ、衣を着て冠を正し、符を帯び鈴を握って立たせた。四人の使者は、盈に告げて言った。「四節隱芝を食する者は、位が真卿となり、金闕玉芝を食する者は、位が司命となり、流明金英を食する者は、位が司祿となり、長曜雙飛を食する者は、位が真伯となり、夜光洞草を食する者は、左右御史を統括する。そなたはこれらのものをすべて食べなさい。壽命は天地に等しく、位は司命となり、東嶽上卿を授かり、呉越の神仙を統治し、揚子江の左の山や川を統治するであろう」と。言い終わり、使者はともに去った。五帝君は、

各々の方角の車や衣服を身に付けて、その庭に降り、大帝の命令を伝え、盈に紫玉の版、黄金の刻書、九錫の文を授けた。盈に東嶽上卿司命真人太元真人を拝命させた。すべてのことを終えると、ともに去って行った。西王母と盈の師である西城王君は、盈のために天厨を用意した。宴がたけなわになると玄霊の曲を歌った。宴会が終わり、西王母は王君と盈を携え、盈の二弟のほうを振り返り、それぞれ道の要訣を授けた。西王母は上元夫人に命じて、茅固・衷に『太霄隱書』『丹景道精』等の四部の宝経を授けさせた。西王母は『太霄隱書』を手に取り、侍女の張靈子に命じて交信の盟を執り、盈固及び衷に授けさせた。すべてが終わると、西王母は天に昇って去って行った。

(原文)

至王褒¹⁸²字子登、張道陵¹⁸³字輔漢、洎九聖七真、凡得受書者、皆朝王母於崑陵之闕焉。其後紫虛元君魏夫人華存¹⁸⁴、清齋於陽洛隱元之臺。王母於金闕聖君降于臺中¹⁸⁵。乘八景雲輿¹⁸⁶、同詣清虛¹⁸⁷上宮。傳玉清隱書四卷¹⁸⁸、以授華存。是時、三元夫人馮雙禮、紫陽左仙公石路成、太極高仙伯延蓋子、西城真人王方平¹⁸⁹、太虛真人南嶽赤松子¹⁹⁰、桐柏真人王子喬¹⁹¹三十餘真、各歌太極陰歌陽歌之曲。王母爲之歌曰駕我八景輿、歛然入玉清¹⁹²。龍旌拂霄上、虎旂攝朱兵、逍遙玄津際、萬

流無暫停。哀此去留會、劫盡天地傾。當尋無中景。不死亦不生。體彼自然道、寂觀合太冥。南嶽挺真幹、玉映輝穎精。在任靡其事。虚心自受靈。嘉會絳河¹⁹³曲、相與樂未央。歌畢、上元夫人¹⁹⁴答歌亦竟。王母及上元夫人¹⁹⁵、紫陽左仙公、太極仙伯、清虛王君、乃攜南嶽魏華存、同去東南行、俱詣天台霍山。洞宮玉宇之下¹⁹⁶、衆真皆從王母、昇還龜臺矣。王母¹⁹⁷師匠萬品、校領群真。聖位崇高、總錄幽顯。至若邊洞玄¹⁹⁸、躬朝而受道。謝自然¹⁹⁹景侍以登仙。故洞玄及自然傳、謂金母師王母也。玄經所證事迹、蓋多未能備錄。

(書き下し)

王褒、字は子登、張道陵、字は輔漢に至るまで、九聖七真洎り、凡そ書を受くるを得る者は、皆王母に崑陵の闕に朝す。其の後紫虛元君魏夫人華存、陽洛の隱元の臺に清齋す。王母は金闕聖君と臺中に降る。八景雲輿に乗り、共に清虛上宮に詣る。『玉清隱書』四卷を傳へ、以て華存に授く。是の時、三元夫人馮雙禮、紫陽左仙公石路成、太極高仙伯延蓋子、西城真人王方平、太虛真人南嶽赤松子、桐柏真人王子喬ら三十餘真、各々太極陰歌陽歌の曲を歌ふ。王母は之が爲に歌ひて曰く「我が八景の輿に駕し、歛然として玉清に入る。龍旌は霄上を払ひ、虎旂は朱兵を攝り、玄津の際に逍遙し、萬流暫くも停まるなし。此の去留の會を哀しみ、劫尽きて天地傾く。當に

無中の景を尋ぬべし。死せず亦生ぜず。彼の自然の道を體し、寂觀して太冥に合す。南嶽は真幹を挺き、玉暎は穎精を輝かす。任に在るも其の事に靡ず。虚心自ら靈を受く。絳河の曲に嘉會し、相與に楽しむこと未だ央きず」と。歌ひ畢はり、上元夫人の答歌亦竟はる。

王母及び上元夫人、紫陽左仙公、太極仙伯、清虚王君、乃ち南嶽魏華存を攜へて、共に東南に去りて行き、俱に天台霍山に詣る。洞宮玉宇の下、衆眞は皆王母に従ひ、昇りて龜臺に還る。王母は萬品を師匠し、群眞を統領す。聖位崇高にして、幽顕を總録す。邊洞玄の若きに至りては、躬ら朝して道を受く。謝自然は景侍して以て登仙す。故に洞玄及び自然の傳に、金母は王母を師とすと謂ふなり。『玄經』証する所の事迹は、蓋し多く未だ備録すること能はず。

(訳)

王褒、字は子登、張道陵、字は輔漢に至るまで、九聖七眞にはじまり、書を授かることができた者は、皆西王母に崑陵の闕において拝謁した。その後紫虚元君魏夫人華存は、陽洛の隱元の臺で清齋した。西王母は金闕聖君とともに台中に降った。八景雲輿に乗り、ともに清虚上宮に至った。『玉清隱書』四卷を伝え、華存に授けた。この時、三元夫人馮双礼、紫陽左仙公石路成、太極高仙伯延蓋子、西城真人王方平、太虚真人南嶽赤松子、桐柏真人王子喬ら三十名余りの

真人は、それぞれ太極陰歌陽歌の曲を歌った。西王母は、これらのために歌つて言った。「わが八景輿に乗り、ヒューと玉清に入った。龍旌は霄上を払い、虎旂は朱兵を攝り、玄津の岸に逍遙し、萬流は少しも留まることはない。この送別の会を哀しみ時がたつと天地が傾いた。無中の景を尋ねばならない。生死を超越して、かの自然の道を体得し、靜觀して太冥に合する。南嶽は他の何よりも高くそびえ、玉暎は穎精を照り輝かす。任務にはついてはいるがその仕事には関わらない。虚心にして自然と不思議な力を受けとった。天の川の曲にたのしくつどい、ともにする楽しみはまだ尽きることがない」と。歌い終わり、上元夫人の返歌もまた終わった。西王母と上元夫人、紫陽左仙公、太極仙伯、清虚王君は、そこで南嶽魏華存を携へて、ともに東南に去り、ともどもに天台霍山に至った。洞宮玉宇の下、群れなす真人は皆王母に従い、昇つて龜臺に帰つていった。西王母は、あらゆる階級の者を教え導き、多くの真人を統率した。聖位は尊く、幽界冥界を監督した。辺洞玄のごときは、自ら入朝して道を受けた。謝自然は慕つてそばに仕えて登仙した。ところで洞玄及び自然の傳には、金母は王母を師としたと言っている。『玄經』が明らかにしている事跡は、思うに未だに多くはすっかり記録することはできなかつたのであろう。

附記

本稿は、博士後期課程の講義である「アジア思想文化研究特論」の中で平木康平教授の指導の下で訳注を施したものである。

註

- 1 西王母のこと。「金母」という言葉は『拾遺記』に「漢時、童謠曰、著青裙、入天門、謁金母、拜木公」とある。
- 『太平広記』（北宋・李昉撰）、『雲笈七籤』（北宋・張君房撰）は「西王母者」に作る。
- 2 この山の位置は未詳。山東省、江蘇省、安徽省、福建省、浙江省などに同名の山がある。
- 3 『太平広記』は「太虚九光龜臺金母」に作る。
- 4 『太平広記』は「一號曰西王母」はなく、『雲笈七籤』は「亦号曰金母元君」に作る。
- 5 『雲笈七籤』は「道炁凝寂」に作る。
- 6 東王公のこと。「木公」という言葉は『拾遺記』に「漢時、童謠曰、著青裙、入天門、謁金母、拜木公」とある。また、東王公については『神異経』に「東荒山中有大石室、東王公居焉。長一丈、頭髮皓白、人形鳥面而虎尾、載一黑熊、左右頗望」とある。
- 7 『海内十洲記』には「扶桑在東海之東岸、岸直陸行、登岸一萬里、東復有碧海、海廣狹浩汗與東海等、水既不鹹苦、正作碧色甘香味美」とある。
- 8 『史記』孟子傳には「中國名曰赤縣神州、赤縣神州内自有九州、禹之序九州是也。不得為州、數中國外如赤縣神州者、九乃所謂九州也」とあり、また、『河圖括地象』には「崑崙東南地方五千里、名曰神州、其中有五山、帝王居之」とある。
- 9 河南省嵩県及び伊陽県の地。「春秋左氏傳」卷十五に「辛有適伊川見被髮而祭於野者」とある。
- 10 『通志』に「緱氏、周卿士食采（領地）之邑也。又渴侯氏、改爲緱氏。」とある。
- 11 「皆」とは木公、西王母のことである。『太平広記』は「皆以主元毓」となっている。
- 12 「三界」とは天界、地界、水界のことであり、「十方」とは東西南北、東北、東南、西南、西北、上下のことである。
- 13 『後漢書』志第二十一に「岱山在西北有龜山」とある。
- 14 『太平広記』、『雲笈七籤』は「在龜山之春山西那都」に作る。また、「春山」は太陽が没する所であり、『集韻』に「春、一曰山名、日所入」とある。
- 15 崑崙山については曾布川寛『崑崙山への昇仙―古代中国人が描

- いた死後の世界―』（中公新書一九八一年）、また、小南一郎『西王母と七夕伝承』（平凡社一九九一年）の中で詳しく述べている。
- 16 崑崙山にある居所。『淮南子』覽冥訓に「昆侖去一萬一千里、上有會城九重、或上倍之、是謂閭風、或上倍之、是謂玄圃」とある。
- 17 『太平広記』は「室」に作る。
- 18 「瑶池」とは『穆王天子傳』卷三に「■乙丑天子觴西王母于瑶池之上……」とあり、穆王が西王母と宴会をする場所である。
- 19 『淮南子』墜形訓に「赤水之東、弱水出自窮石至于合黎余波入于流沙、流沙南至南海」とある。
- 20 『太平広記』、『雲笈七籤』は「宇」に作る。
- 21 『淮南子』覽冥訓では「西老折勝……」と註している。また、『釈名』積首王母折其頭上所戴勝……と註している。また、『釈名』積首飾篇（後漢）に「華勝、華、象草木之華也、勝、言人形容正等、一人著之則勝、蔽髮前爲飾也。」「漢書」司馬相如傳注「勝、新婦首飾也、漢代謂之華勝」とある。
- 22 『太平広記』は「虎」に作る。
- 23 『太平広記』は「摻」に作る。
- 24 『太平広記』、『雲笈七籤』は「植」に作る。
- 25 『莊子』齊物論篇に「女聞人籟而未聞地籟、女聞地籟而未聞天籟」とある。
- 26 『雲笈七籤』は「韻」に作る。
- 27 「天、地、人、金、木、水、火、土」のことである。『雲笈七籤』卷七に「一者陰陽初分、有三元五德八會之氣、以成飛天之書、後撰爲八龍雲篆明光之章。陸先生解三才、謂之三元、三元既立、五行成具。以五行爲五位、三五和合。謂之八會」とある。
- 28 『太平広記』は「琅琅然皆九奏八會之音也」に作る。
- 29 『太平広記』は「神州」に作る。
- 30 『爾雅』積地に「觚竹、北戸、西王母、日下、謂之四荒」とある。
- 31 『太平広記』、『雲笈七籤』は「蓬」に作る。
- 32 『山海經』西山経に「西王母、其狀、如人、豹尾虎齒而善嘯、蓬髮戴勝、是司天之厲五殘」とある。
- 33 元始天王の名は、葛洪の『枕中書』に「昔、二代未分、溟滓鴻濛、天地日月未具、狀如鷄子、混沌玄黃、已有盤古真人、天地之精、自号元始天王、游乎其中」とある。
- 34 『太平広記』は「方」に作る。
- 35 『太平広記』、『雲笈七籤』は「授以萬天元統」に作る。

- 36 「上清元始變化宝真上經九靈太妙龜山玄籙」のことか。
- 37 『太平広記』は「訣」に作る。
- 38 『太平広記』は「凡有所授度咸所關預也」に作る。
- 39 『太平広記』には「昔」の字はない。
- 40 『太平広記』は「而蚩尤幻變多方」に作る。
- 41 『史記』五帝本紀卷一に「軒轅之時、神農氏世衰。諸侯相侵伐、暴虐百姓、而神農氏弗能征。於是軒轅乃習用干戈、以征不享、諸侯咸來賓從。而蚩尤最為暴、莫能伐。炎帝欲侵陵諸侯、諸侯咸歸軒轅。軒轅乃修德振兵、治五氣、藝五種、撫萬民、度四方、教熊羆貔貅獬廡、以與炎帝戰於阪泉之野。三戰、然後得其志。蚩尤作亂、不用帝命。於是黃帝乃。師諸侯、與蚩尤戰於涿鹿之野、遂禽殺蚩尤。而諸侯咸尊軒轅為天子、代神農氏、是為黃帝。天下有不順者、黃帝從而征之、平者去之、披山通道、未嘗寧居」とある。
- 42 『太平広記』は「王母遣使披玄狐之裘」に作る。
- 43 万物の根源、天地創造の元氣。『史記』封禪書に「天神貴者太一、太一佐曰五帝」とある。
- 44 『太平広記』、『雲笈七籤』は「太一在前、天一在後」に作る。
- 45 『墟城集仙録』卷六に「九天玄女」に関する記述がある。黃帝の師である聖母元君の弟子であり、黃帝が蚩尤と戦い負けるとき、九天玄女が降臨し、黃帝に六甲、六壬兵信の符など様々な符を授け、黃帝を勝利へと導いた。
- 46 人の脳内にあるとされる「流珠宮」「太乙宮」「玄丹宮」とのこと。
- 47 『太平広記』は「阪泉」に作る。
- 48 河北省涿鹿縣の東南。
- 49 『太平広記』は「白鹿」に作る。
- 50 『太平広記』、『雲笈七籤』には「晚年復授ノ乃可長生」の文はない。
- 51 『後漢書』馬融列傳「棲鳳皇於高梧宿麒麟於西園納僬僥之珍羽受王母之白環」とあり、その註に「帝王紀曰、堯時僬僥氏來貢沒羽。西王母慕舜之德、來獻白環也。」とある。
- 52 『太平広記』は「舜即位又授益地圖」に作る。
- 53 『漢書』列傳卷九十六上に顔師古が「冀、兗、豫、青、徐、荆、揚、梁、雍」と九州について註をしている。
- 54 『尚書』虞書卷三の肇十有二州に註して、「禹治水之後、舜分冀州為幽州并州、分青州為營州、始置十二州」とある。
- 55 『雲笈七籤』は「王母又使遣獻舜皇瑄」に作る。また、『晋書』卷十六に「又云黃帝作律以玉為管長尺六孔為十二月音。至舜時西王母獻昭華之瑄以玉為之」とある。

56 本来は、風が吹いてくる方向である八方向を指していたが、のちに人の心を指すようになった。

57 関令尹のこと。『列仙伝』巻上に「関令尹喜者、周大夫也。善内学、常服精華。隱徳修行、時人莫知。老子西遊、喜先見其氣、知有真人。當過物色而遮之、果得老子。老子亦知其奇、為著書授之。後与老子俱遊流、沙化胡。服苴勝実、莫知其所終。尹喜亦自著書九篇、号曰関令子」とある。

58 世界の果て

59 『太上老訓説常清静妙経』に「故太極左官仙葛玄曰く吾今於世書而録之」と同様の文が見える。(文物出版社『道蔵』十一冊344頁に所収。)

60 三国時代の呉国丹陽句容の人。字は孝先。左慈より道を学び、『金液丹経』、『太清丹経』、『九鼎丹経』などの秘訣を授かった。道教においては「葛仙公」「太極左仙公」と称される。

61 『列子』巻三 周穆王篇に「命駕八駿之乗、右服驂騮而左綠耳、右驂赤驥而左白梁、主車則造父為御、崑崙為右。次車之乗、右服渠。而左踰輪、左驂盜驪而右山子。柏夭主車、參百為御、奔戎為右。馳驅千里、至於巨蒐氏之國。巨蒐氏乃獻白鵠之血以飲王、具牛馬之。以洗王之足、及二乘之人。已飲而行、遂宿於崑崙之阿、赤水之陽。別日升於崑崙之丘、以觀。帝之宮而

封之以詒後世。遂賓於西王母、觴於瑤池之上。西王母為王謠、王和之、其辭哀焉。西觀日之所入。一日行萬里。王乃歎曰於乎。予一人不盈於徳而諧於樂。後世其追數吾過乎」とある。また、『穆天子伝』巻二、『史記』趙世家に同じ趣旨の文が見える。

62 楊伯峻撰『列子集釈』巻三 周穆王篇に「郭璞云、柏夭、人姓名」とある。

63 古の西戎の国名。『史記』五帝本紀巻一に「方五千里、至于荒服。南撫交趾。北發、西戎、析枝、渠廋、氐、羌、北山、戎發、息慎、東長、鳥夷、四海之内咸戴帝舜之功」とある。

64 白鳥。

65 「穆王逮至命駕八駿之乗く紀迹于崑崙之上而還」の文は、『太平広記』は「周穆王時、命八駿與七華之士、使造父為御、西登崑崙而賓於王母、穆王持白圭重錦、以為王母寿事、具周穆王伝」に作り、『雲笈七籤』は「洎周穆王滿命八駿與七萃之士、驂騮赤驥、蹈驪山子之乗、駕以飛軒之輪、柏夭導車、造父為右、風馳電逝三千里、越剖閭無冕之郷、犀玉玄池之野。吉日甲子、奄崑魚龜為梁、以濟弱水、而升崑崙玄圃閭風之野、而賓于王母。穆天子持白珪重錦、以為王母之寿。歌白雲之謠、刻紀迹于崑崙之上、而還中土矣」に作る。また、西王母と穆王が酒を酌み交わした記述は『穆天子伝』巻三に「吉日甲子、天

- 子資於西王母。乃執白圭玄璧以見西王母、好猷錦組百純、■組三百純、西王母再拜受之。■乙丑、天子觴西王母於瑤池之上。西王母為天子謠曰、白雲在天、山陵自出。道里悠遠、山川間之。將子無死、尚能復來。天子答之曰、予歸東土、和治諸夏。万民平均、吾顧見汝。比及三年、將復而野。西王母復為天子吟曰、徂彼西土、爰居其野。虎豹為群、於鵲與処。嘉命不遷、我惟帝女。彼何世民、又將去子。吹笙鼓簧、中心翔翔。世民之子、唯天之望。西王母還歸丁■。天子遂驅昇於弇山、乃紀丁迹於弇山之石、而樹之槐、眉曰、西王母之山」とある。
- 66 天の九野のこと。中央、四方四隅。
- 67 玉清、上清、太清のこと。
- 68 道教の最高天神。三清に住むとされる。
- 69 『真誥』巻五に「昔漢初、有四五小兒。路上書地戲。一兒歌曰「著青幫入天門、揖金母、拜木公。時人、莫知之、惟張子房知之。乃往拜之曰此乃東王公之童也。所謂金母者西王母也。木公者東王公也。仙人拜王公揖金母」とある。
- 70 『雲笈七籤』は「孝武皇帝徹」と作る。
- 71 五岳の一つ。中岳。河南省登封縣の北。
- 72 心身ともに清めること。
- 73 存思のこと。意識を集中するといった意味で、神々があたかも
- 眼前にいるように想念する養生法のひとつ。
- 74 『雲笈七籤』巻一〇六に「南極夫人乃指西城曰。君當為王子登之師。子登亦佳弟子也」とある。また『雲笈七籤』巻四に「范陽桑平王褒。字子登。以正月一日辭二親。欲尋神仙。求不死之道。乃入華陰山。精思一十八年。遂感上聖太極真人西梁子。下降授飯方并服雲牙法。復五年。太極真人王總真復降。以上清經三十一卷付子登。并將子登遊五嶽。觀名山。備受上法」とある。
- 75 『雲笈七籤』は「吾當暫來也」に作る。
- 76 『漢書』列傳卷六五に「東方朔字曼倩平原厭次人也。」とある。
- 77 『太平広記』巻三、「増訂漢魏叢書」に収められている『漢武帝内伝』は、「二更」に作る。また班固撰、錢熙祚校『漢武帝内伝』（中華書局）註に「即二更也。唱爲二更」とある。
- 78 『雲笈七籤』は「從官不知所在」に作る。
- 79 『雲笈七籤』は「紛若瑱 擿精珍異常」に作る。
- 80 『雲笈七籤』は「欲種之耳」に作る。
- 81 『雲笈七籤』は「種之不生、如何」に作る。
- 82 『雲笈七籤』は「於是王母命王子登彈八珍之璈」に作る。
- 83 『洞玄靈寶真靈位業圖』に「西王母侍女王上華 董双成 石公子 苑絶青 地成君 郭密香 干若賓 李方明 張靈子」と

- ある。
- 84 中華書局『漢武帝内伝』の註に「石如鳴球之類也」とある。
- 85 『雲笈七籤』は「衆声激朗、清音駭空」に作る。
- 86 『雲笈七籤』は「自復佳耳」に作る。
- 87 『雲笈七籤』は「奢侈姿性」に作る。
- 88 『雲笈七籤』は「裂身之車也」に作る。
- 89 『雲笈七籤』では「乃攻之者百刃」に作る。
- 90 三尸虫のこと。人間の体内にいる三尸虫は人が死ぬと祭祀を受
けられるため、人の早死を望み庚申の夜に人体から抜け出し、
天帝にその人の罪過を告げる。
- 91 『雲笈七籤』は「而樂春秋者哉」に作る。『莊子』逍遙篇に
「小知不及大知、小年不及大年。奚以知其然也。朝菌不知晦
朔、蟪蛄不知春秋、此小年也」とある。
- 91 心。
- 92 『雲笈七籤』は「静奢侈于寂室」に作る。
- 93 『雲笈七籤』は「豈無彷彿耶」に作る。
- 94 『雲笈七籤』は「而濟長河耳」に作る。
- 95 『雲笈七籤』は「刑政乖謬」に作る。
- 96 『雲笈七籤』は「先取諸身」に作る。
- 97 「三」とは、また、精、氣、神のこと。「一」は、それら三つ
- 98 一つにすることである。
- 99 下丹田。舌のこと。
- 100 腎。
- 101 『雲笈七籤』は「灌沈珍漑長」に作る。
- 102 鼻。
- 103 肺。
- 104 中丹田・臍。
- 105 上丹田。
- 106 脳内に存在すると考えられている流珠宮、太乙宮、玄丹宮。
- 107 心臓の下。
- 108 脾臓。
- 109 心臓、腎臓、肺、肝臓、脾臓。
- 110 咽喉、胃、大腸、小腸、胆のう、膀胱。
- 111 『雲笈七籤』は「吐納六府魂魄欣却此百病辟熱寒」に作る。
- 112 『雲笈七籤』は「此所謂呼吸太和、保守自然」に作る。
- 113 『雲笈七籤』は「上帝奇物」に作る。
- 114 『雲笈七籤』は「地下陰生、重雲妙草」に作る。
- 115 『雲笈七籤』は「乃太上之所服、非中仙之所宝。其中品者、有
得服之、後天之逝、乃天真之所服非下仙之所逮」に作る。
- 116 砒素、硫化水銀を成分とする丹砂。

- 117 酢酸鉛。
- 118 珪酸アルミニウム塩。
- 119 糊のようにどろりとした液状のもの。
- 120 酢酸鉛。
- 121 硫化砒素。
- 122 「雄黄」とは硫化砒素であり、「雌黄」は硫化砒素、硫黄のことである。
- 123 三神山（蓬萊・方丈・瀛洲）の一つ。東方の海の中（渤海）にあり、神仙が住むという。
- 124 白銀。
- 125 硫化水銀。
- 126 朱（辰砂、湖南省辰州にある。水銀と硫黄の混合物）、汞（水銀）、硼（硼素）、硃（アンモニウム）硝（硝酸）、塩（食塩）、礬（明礬）胆（硫化銅からなる鉱物・胆礬）。
- 127 九光丹（酸化鉛）。
- 128 石胆（硫酸銅）。
- 129 蒼州（仙人の住む所）。
- 130 禹余糧（酸化鉄）。
- 131 酸化鉄。
- 132 水銀、雄黄、曾青（青銅）、礬（明礬）、硫黄、鹵咸（炭酸ナトリウム）、碧石（砒素を含んだ毒性のある石）、太乙禹余糧（酸化鉄）
- 133 「雲笈七籤」は「千」に作る。
- 134 真昼に衆人がみている中で天上に昇って仙人となること。道教の究極的な到達点。
- 135 黒ごま。
- 136 「雲笈七籤」は「求入道者」に作る。
- 137 「雲笈七籤」は「漸而能致遠勝也」に作る。
- 138 「雲笈七籤」は「取之於身耳」に作る。
- 139 「雲笈七籤」は「而不知此」に作る。
- 140 「雲笈七籤」は「亦皆如之」に作る。
- 141 「雲笈七籤」は「豈可不養神固氣、以全爾形也」に作る。
- 142 「雲笈七籤」は「形滅神逝、豈不痛哉。一失此身、萬却不復、子其宝焉。我之所言、乃我師元始天王所授之詞也」に作る。
- 143 「雲笈七籤」は「出之以付於帝曰汝善修之焉」の文はない。
- 144 『壙城集仙録』巻二に記述がある。道君の弟子であり、西王母のところで真籍の類を統括していた。また、西王母が俗世間を下るときには多くの侍女とともに下った。
- 145 あらゆる気が集まる場所を表した書。
- 146 道士が山中に入るときにもつ護符。五岳を現したもの。古いも

- 147 のは後漢にまでさかのぼることが出来る。
- 148 『雲笈七籤』は「天高地卑」に作る。
- 149 『雲笈七籤』は「五岳鎮形」に作る。
- 150 『雲笈七籤』は「太澤玄精」に作る。
- 151 符のこと。
- 152 『雲笈七籤』は「泄墜滅寶腐」に作る。
- 153 『史記』卷十二に「是時而李少君亦以祠穀道、卻老方見上、上尊之。少君者、故深澤侯入以主方。匿其年及所生長、常自謂七十、能使物、卻老。其游以方諸侯。無妻子。人間其能使物及不死、更饋遺之、常餘金錢帛衣食。人皆以為不治產業而饒給、又不知其何所人、愈信、爭事之。少君資好方、善為巧發奇中。嘗從武安侯飲、坐中有年九十餘老人、少君乃言與其大父游射處、老人為兒時從其大父行、識其處、一坐盡驚。少君見上、上有故銅器、問少君。少君曰、此器齊桓公十年陳於柏寢。已而案其刻、果齊桓公器。一宮盡駭、以少君為神、數百歲人也」とある。
- 154 『雲笈七籤』は「若將傳付汝之所有董仲君李少君可校之爾」に作る。
- 155 『雲笈七籤』は「以祐黎庶也」に作る。
- 156 『雲笈七籤』は「因笑指東方朔曰」に作る。
- 漢の武帝の晩年（前九一）、皇太子が宮中でまじないをし、天
- 157 子を呪ったという風評がたち、太子が自殺に追い込まれた事件。
- 158 『漢武帝内傳』『漢書』は「柞」に作る。
- 159 『雲笈七籤』は「盛以金箱、一旦出於抱犢山中」に作る。
- 160 今の陝西省咸陽県の東。
- 161 『雲笈七籤』は「而箱杖出於人間、此亦得托形尸解之驗也」に作る。
- 162 前漢咸陽のひと。字は叔申。幼少のとき恒山で修道し、のちに句曲山に隠れて修練し仙人となって去った。
- 163 『太平広記』は「茅君從西城王君」に作る。
- 164 『太平広記』は「求長生之道曰」に作る。
- 165 『太平広記』は「欲以朝菌之脆求積朔之期」に作る。
- 166 『太平広記』は「皇天扶桑帝君」に作る。
- 167 日と月。
- 168 万物の根源。
- 169 東西南北・東北・東南・西南・西北・上下。
- 170 『太平広記』は「入天門」に作る。
- 171 『雲笈七籤』は「大茅君盈」に作る。
- 172 茅山派の発現地。
- 『雲笈七籤』は「元寿二年八月巳酉」に作る。

- 173 貴州省貴陽市南山にある。
- 174 『雲笈七籤』は「方諸青童君」に作る。
- 175 『雲笈七籤』は「茅盈之室」に作る。
- 176 漢の武帝のときに朝廷から地方の悪事を調査・討伐するために派遣された官。
- 177 官吏の不正をあばいて取り調べる官。
- 178 流金火鈴（驅邪制魔の法器）。
- 179 『雲笈七籤』は「使盈食芝佩璽」に作る。
- 180 茅固・茅衷のこと。
- 181 『雲笈七籤』は「西王母昇天而去」に作る。
- 182 前漢建昭年間范陽襄平（現遼寧遼陽市）の人。字は子登。号は清虚真人。
- 183 後漢沛国豊（現江蘇豊県）の人。『三国志』張魯傳などに記載がある。
- 184 西晋任城（現山東濟寧県）の人。字は賢安。幼い時から道を学ぶことを好み、『老子』や『莊子』をよく学んだ。上清派第一代の宗師となった。『雲笈七籤』は「魏華存夫人」に作る。
- 185 『雲笈七籤』は「西王母與金闕聖君降於台中」に作る。
- 186 『雲笈七籤』は「乘八景輿」に作る。
- 187 清静虚無の世界。
- 188 『大洞滅魔神慧玉清隱書』のことか。東晋に上清派によってつくられた。主に神仙の力によって長生不死の道を会得することが書かれている。
- 189 西城総真人、王遠のこと。字は方平。東海の人。『歴世真仙体道通鑑』巻五に記述がある。
- 190 『列仙傳』巻上に「赤松子者、神農時雨師也。服水玉以教神農、能入火自燒。往往至崑崙山上、常止西王母石室中、隨風雨上下。炎帝少女追之、亦得仙俱去。至高辛時、復為雨師、今之雨師本是焉」とある。
- 191 字は子晋。周の靈王の太子であり、生まれながらにして神鬼に通じ、幼少のときから道をよく学んだ。
- 192 道教の再興の仙境である「三清境」の一つである。元始天尊の居るところ。
- 193 天のこと。
- 194 『雲笈七籤』は「三元夫人」に作る。
- 195 『雲笈七籤』は「三元夫人」に作る。
- 196 『雲笈七籤』は「俱詣天台霍山過句曲之金壇宴太元茅真人於華陽洞天留華存於洞宮玉宇之下」に作る。
- 197 『雲笈七籤』は「太真金母」に作る。
- 197 『雲笈七籤』は「太真金母」に作る。

中唐のときの女道士。『雲笈七籤』卷一一六に伝がある。
中唐のときの女道士。『歴世真仙体道通鑑後集』卷五に伝がある。